

「考動力」作文コンテスト・大学生の部

発行日 平成 26 年 3 月 31 日 (月)
発行元 関西大学教育推進部
ライティングラボ
林田 定男・小林 至道
西浦真喜子・吉崎 裕子

関西大学教育推進部は伊丹市教育委員会のご協力のもと、大学間連携共同教育推進事業「(考え、表現し、発信する力)を培うライティング/キャリア支援」の高大連携事業および広報活動の一環として、「考動力」作文コンテストを開催しました。コンテスト開催は初の試みでしたが、高校生の部と大学生の部を合わせて、690 作品の応募があり、第 1 回のコンテストとしては十分な規模となりました。応募作品の内訳は、高校生の部 598 作品(エッセイ部門 354、ショートショート部門 244)、大学生の部 92 作品(エッセイ部門 76、ショートショート部門 16)でした。多数のご応募、有難うございました。応募者ならびに関係各位に厚く御礼申し上げます。

ご応募くださった作品は力作揃いで、甲乙つけ難く審査は難航しましたが、審査員 11 名が慎重に議論を重ねました。結果として、高校生の部ではエッセイ部門で最優秀賞 1 作品、優秀賞 2 作品、ショートショート部門で最優秀賞 1 作品、優秀賞 2 作品、特別賞 1 作品、また、大学生の部ではエッセイ部門で最優秀賞 1 作品、優秀賞 2 作品、ショートショート部門で最優秀賞 1 作品、優秀賞 2 作品、をそれぞれ選出するに至りました。

審査全体の感想をひと言でいえば、「らしさ」が溢れていたということです。高校生は高校生のそれ、大学生は大学生のそれを良くも悪くも感じました。

ここでは、大学生の部の受賞作品と講評を部門別に述べてまいりたいと思います。

【エッセイ部門講評】

大学生の部のエッセイ部門 76 作品に対する審査は、明確性、論理性、普遍性、独創性の 4 つの観点から行いました。高校生の作品群と比べると、やはり「客観性」が保たれていたというのが率直な感想です。しかし、メッセージ性においては、高校生の方に軍配が上がるように思いました。大学生は、所属する学部の色が出ており、応募者それぞれの専門知識が作品に反映されているように感じました。今後の課題を挙げるならば、得た

エッセイ部門・受賞作品と受賞者

最優秀賞

「考動力で世界を変える」

西山弥重子さん(商学部 2 年)

優秀賞

「日本のコミュニティは減少しているか」世戸美津帆さん(社会学部 2 年)

「どう見られているかではなく、

どうありたいか」

矢寺 柚里さん(商学部 2 年)

特別賞

「大人と子どもの考動力」

加藤 菜月さん(文学部 1 年)

知識をどのように活用していくかということになるでしょう。資料の羅列ではなく、資料の活用によって、「客観性」を確保することを意識してください。それでは、受賞作品を見ていきましょう。

最優秀賞の西山弥重子さんの作品は、「援助する側」と「援助される側」を対比させて論述することによる明確性、「援助される側」の視点からの国際協力を論じるという独創性をとくに評価しました。資料を駆使しながらの立論は特筆すべき点ですが、「国際協力の現状」の部分で紹介された「6 つのバイアス」の部分は、さらに掘り下げる必要があるように思います。

優秀賞の世戸美津帆さんの作品は、明確性をとくに評価しました。複数の資料を用いて、多方向から論を展開されておられるところは好感がもてました。背景となる「コミュニティの減少」についての説明、さらに非常時の「コミュニティ」のあり方を「コミュニティ」と呼ぶにふ

さわしいかという点などについては、議論の余地があるように思います。

同じく、優秀賞の矢寺柚里さんの作品も、明確性をとくに評価しました。立論の根拠となる資料が少ないという点は改善すべき余地がありますが、審査員は大学生らしい気概に押し切られてしまいました。ただし、先ほども述べたとおり、今後、日本人論、場の理論といった本論に関係する資料も、広く参照されとさらに内容が充実したものになるでしょう。

特別賞の加藤菜月さんの作品は、独創性をとくに評価しました。「大人の考動力」「子どもの考動力」という視点がユニークで、しかも「ピクサー」を題材としているところにセンスの良さを感じました。論の前提として、「子どもの考動力」の必要性を、もう少し具体的に述べることによって、さらに深みのある論となることでしょう。

【ショートショート部門講評】

大学生の部のショートショート部門 16 作品に対する審査は、全体的な構成、伏線とオチ、表現力、独創性の 4 つの観点から行いました。高校生の部の作品と比べると、やはり読者を意識した作品が多いように感じました。家族関係や恋愛をモチーフにした作品が大半を占めました。

最優秀賞の古谷友香里さんの作品は、4 つの審査観点すべてで高く評価できます。内容をひと言でいうと、介護施設で暮らす「ばあちゃん」の恋を「私」の視点から描いたものとなるでしょう。家族とは何なのか、老いるとはどういうことなのか、人として生きる意義を多方向か

ショートショート部門・受賞作品と受賞者

最優秀賞

「さよならワッペンさん」

古谷友香里さん(文学部 2 年)

優秀賞

「時は移ろい 日は流れ」

山下 壮士さん(社会学部 1 年)

「考動力」

山本 綾香さん(文学部 3 年)

ら考えさせられる作品でした。

優秀賞の山下壮士さんの作品は、全体的な構成をとくに評価しました。大学生の日常が良く表れた作品で、好感がもてました。表現力も、全体的には高く評価できるのですが、若干、気になるところもありました。

同じく優秀賞の山本綾香さんの作品は、表現力をとくに評価しました。スト

ーリーは父と娘のすれちがいを描いたもので、ショートショートとしてはもうひとひねりほしいところでした。しかし、表現力(随所にちりばめられた秀逸な表現)はその欠を補って余りあるものでした。

では、受賞作品とそれぞれの方からいただいた喜びの声をご覧ください。

【エッセイ部門最優秀賞】
考動力で世界を変える
商学部 2 年 西山弥重子

1. はじめに

「考動力」とは、「自らの頭で自主的によく考え、自立的かつ積極的に行動する力」と関西大学は定義している。「考動力」は、関西大学の学生だけではなく、全国の学生あるいは、すべての国や地域の人々に当てはまる目標であると考えられる。

近年、テレビや新聞などのメディアでさまざまな発展途上国の貧困や食料問題、紛争などが取り上げられており、実際に多くの発展途上国に対する国際的な支援や開発などが実施されている。しかし、現在実施されている国際協力によって、すべての発展途上国の人々が幸せになっているわけではない。その原因の一つに、支援や開発などの現場で、援助する側である先進国の人々の「考動力」は常に考えられているが、援助される側である発展途上国の人々の「考動力」についてはあまり考えられていないことが挙げられる。発展途上国の人々の「考動力」とは、支援や開発の場において、先進国の人々にすべて任せるとではなく、発展途上国の人々自身が積極的にその活動に参加し、自立していくことである。発展途上国の人々が「考動力」を身につけることで、世界は変わることができるのだろうか。私は、発展途上国の人々の「考動力」によって、世界を変えることができると考える。

2. 国際協力とは

国際協力とは、「国際社会全体の平和と安定、発展のために、発展途上国・地域の人々を支援すること」と、独立行政法人国際協力機構 JICA は定義している。現在、世界には 195 もの国があり、そのうちの 150 ヶ国以上が発展途上国である。発展途上国の多くは、貧困や紛争といったさまざまな問題を抱えている。貧困は、衛生状況を悪化させるだけでなく、教育や雇用の機会を奪い、社会不安を引き起こすことから、紛争の原因にもなり得る。

例えば、現在 7700 万人もの子どもたちが小学校での教育を受けることができていない。その半数以上は衛生状況が悪く、紛争が多発するアフリカやアジアなどの地域の子どものたちなのである。このような問題はすでに世界全体に浸透しており、決して発展途上国だけの問題ではない。現在、世界中のすべての人々がより良く生きられる未来を目指し、人

類共通の課題に取り組むことが求められている。

3. 援助される側の「考動力とは」

発展途上国の人々に「考動力」を身につける機会を与えることができる活動として、1990 年代以降の重要な国際戦略として取り上げられている参加型開発がある。参加型開発の理念は、「貧困から抜け出すための開発を人間中心の活動としてとらえ、途上国の人々の主体性を尊重し、その人々自身が力をつけることで自らの状況の改善をはかること（エンパワーメント）」と、『参加型開発』の著者である斎藤文彦は述べている。この理念は、発展途上国の人々の「考動力」と類似している。先進国の人々に援助してもらうことで、発展途上国の人々自身が生活改善のための開発の中心となっていくことが求められる。

また、先進国の人々の「考動力」を考えることも大切である。発展途上国の人々が主体的に開発に取り組むためには、先進国の人々が開発活動を行うための状況を把握することが必要であり、発展途上国のあり方を見直し、発展途上国の人々が参加できる機会をさらに増やすことが求められる。そして、「部外者がトップダウン的に支配・介入したり、指摘・監督したりするのではなく、横から対等なパートナーとして参加する」ことが大切であると、『参加型開発』の著者である斎藤文彦は述べている。

これは、インドでの県民皆識字運動を例に挙げると分かりやすい。県民皆識字運動とは、「各県で、数万人にのぼる地域のボランティアが活動の担い手として活躍し、各県ごとに数十万人規模で存在する文字の読み書きができない非識字者を数年かけて識字者にする」という大規模な運動である。この運動において、先進国の人々の「考動力」が発揮されている点が 2 つある。1 つは、ボランティア中心で担われている点である。県行政長官だけが識字運動を進めていくのではなく、県行政に加えて、地域 NGO や地域住民(地域の活動家)の三者が協力している。これが行政によるトップダウンの政府開発事業では見られない住民の自主性・主体性を作り上げている。

もう 1 つは、掲げている目標である。読み書きそろばん能力の獲得に留まらず、生計向上そして社会開発事業へのつなぎをつくり、かつ女性の社会参加を高めるといった目標を掲げている。例えば、識字完了後の女性をグループとして統合し、「貧困女性のための銀行」へと発展させようとしたり、他の社会開発プロジェクトへとつなげようとしたりして

いる。このようなインドでの県民皆識字運動で活かされている先進国の人々の「考動力」によって、発展途上国の人々の「考動力」のきっかけが作られているのである。

4. 国際協力の現状

発展途上国の人々が「考動力」を完全に身につけることができていない現在でも、国際協力は成り立っているのではないかという反論が挙げられる。確かに、非政府組織 NGO が取り組んでいる貧困層向け小口金融(マイクロファイナンス)やインドでの県民皆識字運動などの国際協力で、次々と数多くの実績が出ている。しかし、ほとんどの国際的な支援や開発の場で、援助される側と援助する側との意見の対立や援助される側の意見を無視した一方的な援助がなされているのは事実である。これは、援助する側の人々の国際協力に関する知識や技術、異文化適応力、支援や開発に対する意識などが乏しいことが原因として挙げられる。

この問題を解決するためには、イギリスの開発学者ロバート・チェーンズ氏の「6 つのバイアス論」を中心に考えるべきである。「6 つのバイアス」とは、「①場所(立地、都市からのアクセスの容易性)、②プロジェクトの有無(プロジェクトのない地域の実情は外部に伝わらない)、③接触する相手(男性、地元エリート層への偏り)、④季節(外部者が訪問する時期)、⑤外部への儀礼(貧困や不正は「恥」であるという意味の普遍性)、⑥訪れる外部者の専門性」と、「国際協力の誕生」に書かれている。この「6 つのバイアス」を援助する発展途上国の状況に当てはめながら、第一に援助する側の「考動力」を高め、援助する側が援助される側、すなわち発展途上国の人々の「考動力」を高めることで、よりよい国際協力ができるのではないかと考える。

5. おわりに

国際協力は、これまで述べてきたような発展途上国に対する援助だけではなく、阪神淡路大震災や東日本大震災によって、日本でも多くの国際的な援助が実施されている。今まで援助する側、すなわち先進国の 1 か国として国際協力に取り組んできた日本が、現在援助される側として国際協力について見直す時期であると考えられる。援助される側が「考動力」を身につけ、主体的に支援や開発に関わることで、その支援や開発の進行がより速く進み、世界が良い方向に変わっていくのではないだろうか。

西山さんの喜びの声

この度は、最優秀賞という素晴らしい賞をいただき大変光栄に思っています。作品を提出するにあたって、たくさんの苦難がありましたが、實淵洋次先生や「文章力をみがく」の授業で半年間共に学んだ仲間、ライティングラボで指導してくださった方のおかげで受賞することができました。「文章力をみがく」という授業は文章力を身につけるために履修しました。實淵洋次先生の指導の下、受講者全員で文章力を磨き、今回の作文コンテストに応募するための準備をし、作品の校正を繰り返し行うことができたことが受賞に繋がったと考えています。また、今回の作文コンテストのおかげでライティングラボの存在を知ることができました。来年から就職活動が始まり、授業のレポートや卒業論文なども作成していかなければなりません。その際はライティングラボの利用を考えていますので、よろしく願いいたします。最後に、今回の作文コンテストに関わるすべての方々にお礼申し上げます。本当にありがとうございました。

【エッセイ部門優秀賞】**日本のコミュニティは減少しているか****社会学部 2 年 世戸美津帆****1. はじめに**

皆さんは、今まで日本におけるコミュニティの減少について聞いたことがあるのではないだろうか。そもそもコミュニティとは「一定の地域に居住し、共属感情を持つ人々の集団。地域社会。共同体。」(広辞苑、2008)のことであるが、コミュニティとは日本という国全体も含めれば、県、市、町のように地域を更に細かく分けてそれぞれをコミュニティとしても捉えることができる。また、地域だけでなく、家族、会社などの個々人が所属する集団のこともコミュニティとして扱うことができる。このように一口にコミュニティと言っても色々な種類がある。初めに日本のコミュニティの減少について聞いたことがあるのではないかと切り出したが、今回はコミュニティの中でも家族と地域について論じていきたい。

さて、家族と地域における共属意識が薄れつつあるという話は、特にここ数年で話題になっている孤独死と関連付けてよく語られていて、聞いたことがある方は多いだろう。私自身もそうであったが、家族と地域のコミュニティが減少していると聞くと、昔に比べたら……と、なんとなく納得するところがあるのではないか。しかし、その「なんとなく」は本当に正しいだろうか。今回、このような日本のコミュニティの減少説について、「考動力」をテーマに論文を書く上で、一面的なデータで納得するのではなく、自ら考えることによって、物事を判断し行動するべきだという考えを踏まえて、コミュニティについてのデータの一方的な見方を指摘すると同時に、日本のコミュニティは必ずしも減少している訳ではないと主張する。

2. 日本の家族コミュニティ—単身世帯の増加

まず、日本のコミュニティの現状はどのようなものなのか。初めに家族とのかかりについてのデータを挙げていきたい。『平成 23 年版厚生労働白書』によると、日本における単身世帯は 1980 年の約 750 万世帯から徐々に増加し、2005 年には 1445 万 7 千世帯に上っている。このデータから、この 20~25 年の間に一人暮らしの人が増加していることが分かる。次に『平成 19 年版国民生活白書』によると、親世代と既婚の子ども世代の同居率は調査開始の 1980 年の 52.5%から、2004 年の 23.3%まで下降し続けていることが分かる。つまり、自立した後に親と離れて一人で暮らす人が増えていることが分かり、2つのデータから親と離れて暮らす子と、子が離れていったことにより一人暮らしになってしまう親が増えたと読み取ることが可能である。

3. 日本の地域コミュニティ—付き合いの減少

近所付き合い(地域)はどうであろうか。初めに『平成 19 年版国民生活白書』によると、町内会・自治会の参加程度について 1980 年は「だいたい参加する」が 70.2%と、7 割を占めていたのに対し、2007 年は「参加していない」が 51.5%と半数を占め、「月に 1 度程度以上」が 12.7%であることが分かる。つまり、近所の人々と必然的に会うことになる地域の会議に行く人が減っているのである。次に同じく『平成 19 年版国民生活白書』によると、隣近所との望ましい付き合い方について、「あった時に挨拶する程度」が 1973 年は 15.1%、「なにかにつけ相談したり、助け合える」が 34.5%であったのに対し、2003 年の調査では前者が 25.2%と増加し、後者が 19.6%と減少している。この 2つのデータから地域、近所との付き合いは昔に比べて確かに減少したことが分かる。

4. 家族のあり方の変化—重要度の上昇

このように、家族と地域におけるコミ

ュニティは減少していると読み取れるようなデータが存在することを確認できるが、では本当にこれらのコミュニティは減少していると言えるのか。私はこれらのデータを批判する上で、コミュニティの見方を変えていくことを中心として考えていきたい。

まず、家族について『平成 19 年版国民生活白書』では、選択肢制の「あなたにとって一番大切なものは何か」という問いに対し、「家族」と答えた人が 1988 年の約 33%に対し、2005 年は約 45%に上昇している。また同じく『平成 19 年版国民生活白書』では、別居家族との付き合いに関して「電話で世間話をする」、「家を訪ねて行ったり来たりする」というような、特に理由もなく関わりあうという選択肢こそ 1985 年と 2005 年を比べると 2005 年は減少しているものの、残りの選択肢である「困ったことがあったら相談をしたりうけたりする」、「一緒に旅行したりドライブに行く」、「家事の手伝いや身の回りの世話に行ったり来たりする」、「孫(子)の世話に来たり、預けたりする」という選択肢は全て 1985 年よりも 2005 年の方が上昇しているのだ。

この 2つのデータにより、最近の日本の家族における別居率が上昇していることは確かであるが、別居していることがイコール関わり合いの喪失ということではなく、むしろ離れていても家族をより重要視し、必要があればお互いに歩み寄っているのである。このデータを根拠に、親と離れ一人で暮らす日本人が増えたことにより家族のコミュニティが減少したという考えは一面的な見方であり、あまりにも安易である。

5. 災害時にみる地域の絆**—未だ根強い助け合いの心**

次に、地域のコミュニティについて、最近の日本の地域コミュニティは会議の不参加が増加し、近所の人々とは挨拶程度の関係であるというデータがあったが、果たしてこれにより日本における

地域コミュニティが減少したと言い切れるのだろうか。今回は地域コミュニティを、災害時に焦点を当てて考えていきたい。

山崎(2011)の著書の中で青木は「日本は災害の国だから、一年中自然災害がどこかで起きる国である。そういう災害の国で日本人が暮らしていくためには、個人の力は小さなものだから、集団で暮らすことが必要不可欠だったと思う。」と述べている。これは2011年の東日本大震災後に書かれた著書であるが、実際に東日本大震災における地域の助け合いは世界でも称賛された。『日経ビジネス』(2011年4月25日)によると、米ハーバード大学教授のマイケル・サンデルは、自身の講義において、

「あれだけの震災に遭いながらパニックも起こさず、(2005年に米国南部を襲った)ハリケーン・カトリーナの時に見られた強盗も便乗値上げもなかったことは驚きだった」、「(原発問題では命懸けで取り組むという)信じられない自己犠牲もあった。この際立った公共性、秩序、そして冷静さ。略奪や便乗値上げなど考えもしないコミュニティーへの連帯意識があった」

と称賛した。更に東日本大震災での行動を裏付けるように、『平成19年版国民生活白書』では、「地域での望ましい付き合い」について「困ったときに助け合う」

と答えた人々は2004年の時点で62.5%に上るのだ。ここで主張したいことは、普段の地域の会議への参加や、挨拶が減少していることがコミュニティの減少と言い切れるのかということである。先程データを示したように、日本には昔から根強く助け合う心や共同体意識が変わらず残り、困ったときはお互い様と、当たり前のように協力するのである。もし日本の地域コミュニティが減少しているのであれば、外国から称賛されることや、震災被害時において強盗が目立って発生しないということは有り得るだろうか。家族のコミュニティの主張部分と同じく、このように異なった見方をすれば必ずしもそうでないと言えるのではないか。

6. 結論

ここ数年で孤独死が話題になり、日本のコミュニティが減少しているのではないかという話題が多い。確かに日本のコミュニティ減少を根拠付けるようなデータが存在するが、それらは一面的な見方に過ぎない。メディア等で流れる情報だけを見て納得するのではなく、情報について自分で考え納得することで他の面が見えてくることは多い。そして、自らが納得した情報を基に行動するような、まさに「考動力」をつけることによって、家族の重要性はむしろ上昇し、地域における人々の変わらぬ共同意識は昔も今も存在し続けていると分かり、

違った見方を得ることができる。以上のことから私は、日本のコミュニティは必ずしも減少している訳ではないと主張する。

参考文献

新村出 編、『広辞苑』第6版、岩波書店、2008年

山崎丈夫、『大地震とコミュニティ』、自治体研究社、2011年

厚生労働省、「平成23年版厚生労働白書」、

<http://www.mhlw.go.jp/wp/hakusyo/kousei/11/>

2013年12月23日確認

内閣府、「平成19年版国民生活白書」、

http://www5.cao.go.jp/seikatsu/whitepaper/h1910_pdf/01_honpen/

2013年12月23日確認

日経ビジネス、『マイケル・サンデル教授も称賛した日本の「助け合い」精神』、

武田斉紀、2011年4月25日(月)

2013年12月23日確認

<http://business.nikkeibp.co.jp/article/mange/20110421/219533/?P=1>

ルイス・ワース、「生活様式としてのアーバンイズム論」、1938年

C.S フィッシャー、「アーバンイズムの下位文化理論に向けて」、1975年

矢橋洋、「都市度と友人ネットワークの相関関係」、1998年

<http://www-soc.kwansei.ac.jp/otani/research/02sotsuron/02mokuji.htm>

2014年1月6日確認

世戸さんの喜びの声

今回私は、この「考動力」作文コンテストに、大学の授業である、「文章力をみがく」の授業の一環として応募させて頂きました。授業において論文の書き方を一から詳しく学び、最終的に自分で論文を書き上げるという流れでした。また、受賞させて頂いた論文も、制作途中において授業で先生や授業におけるグループで、より良い文にするにはと相談したり、更にライティングラボを活用することによって、少しずつですが論文における文章力がついてきたかなと実感することができていました。そして今回このように、完成した論文が受賞させて頂けたと聞いて、まさに授業を受け、ライティングラボに相談に行った成果が出たのだなと実感し、とても嬉しく感じました。

今回授業とライティングラボにおいて学んだ論文についての知識を忘れずに、また受賞させて頂いたことを自信に、これからより文章力を磨いていけたらなと思いました。そして、この論文の制作において力を貸してくださった皆様に感謝の気持ちでいっぱいです。ありがとうございました。

【エッセイ部門優秀賞】 どう見られているかではなく、 どうありたいか

商学部2年 矢寺柚里

はじめに

考動力とは、自分の考えに素直になることである。自分がやりたいと思ったことに気づいた時に実現させようと努力することだ。例えば、歌手になりたいという夢があったとする。しかし、「でもなれるわけないよな」や、「でも成功するまでに時間もお金もかかりそうだな」や、「でも世間に笑われそうだな」など

という、自分の本当の声を阻む、もう一人の声が頭の中で囁く。その、「でも…」という声に打ち克つことが考動力だ。

日本には、世間体や、勝ち組、負け組、といった、世間の目を意識する日本人らしい言葉が存在する。この、世間の目を気にする習性は、私たちの行動の妨げになっている。日本人は、選択肢を突き付けられた時、周囲の目によりよく映るものを選ぶ傾向が強いようだ。なぜこちらを選んだのかと問えば、「人に○○だと思われたいから」や、「就職活動の時に有利だと思うから」など、本人の考えよりも世間体が優先されており、その選択

肢が正しいと思い込んでいる。さらに、これが習慣化され、他人に意見をもとめ、他人と同じものを選ぶ。そして、本当に自分のしたいことを見失ったり、また見つけようとしなかったりと、本人の意思が希薄化していく。

なぜ、ここまで人の目を気にする必要があるのか。そこには、日本人と世間には切っても切り離せない深いつながりがあることが考えられる。このレポートでは、まず、世間という言葉の意味を述べ、次に、なぜ日本人は世間を気にするのかということを論じる。そして最後に、これから日本の若者が自分の選びたい

道を選び、これからの広いグローバル社会の中で活躍するためにはどうすべきなのか、また何が必要なのかということと言及する。

世間とは

まず世間という意味を考えよう。私たちが世間という言葉を使うとき、そこにマイナスの意味を含ませる。例えば、「世間知らず」、「世間では許されない」、「世間に顔向けできない」や、「世間を騒がす」などと使い、見られているという印象を強く持たせる。

広辞苑で世間の意味を調べると、人の世、人生、世の中、世の中の人々、世間づきあい、交際の範囲などであり、人々というイメージである。

阿部謹也(1995)は、「世間とは個人個人を結ぶ関係の環であり、会則や定款はないが、個人個人を強固な絆で結びつけている。しかし、個人が自分からすすんで世間をつくるわけではない。なんとなく自分がそこにあるものとして生きている。」と世間を定義づけている。ここでの世間は、日本人が生きている場所という印象を受ける。

また、愚管抄の中で慈円は、「世というのはけっきょく人のことなのである。人にとって世というものは何かといえ、人が国家・朝廷の道理にもとづきながら国政に関与して善悪を定めたものことである。」と述べている。

言葉の使い方、広辞苑での意味、阿部謹也の定義、慈円の考えから、世間とは私たちの活動の場であり、暗黙のルールを持つ。そして人の行動を監視し、善悪の判断をしている物だと言える。つまり、暗黙のルールで物事を評価する人々だ。世間を構成する要素は、人々の嫉妬や恨み、欲望など人間が持つ負の感情であり、これらの感情が暗黙のルールを生み出している。

なぜ日本人は世間を意識しすぎるのか

次に考えるのは、なぜ私たちは世間の目を気にして行動するのかということである。

阿部謹也は次のように論じている。

「日本の個人はすべて世間の中に位置を持っているから、初対面の人の場合

でもいったいどういう人なのかをまず探らなければ始まらない。どういう人なのか性格なども問題になるが、それよりもどういう世間に属しているかが問題なのである。そこで、初対面の人には、まず出身校や出身地、どこの会社の人なのか、どういう地位なのかをそれとなく聞き出し、相手がどういう世間に属している人なのかを想定する。そのうえで初めて性格や趣味などが問題になる。世間が違いすぎると親しくなる可能性は低いのである。」

このことから、私たちは学校を決める時も、就職先を決める時も、少しでもランクの高いところへと偏差値の高い学校を選び、大手企業を選ぶのだ。実際、2013年の就職先人気企業ランキングに、文系では三菱商事や住友商事、理系ではJR 東日本や日立製作所など、大手企業がランクインされている。(ダイヤモンド就活ナビ HP より)

また歴史を見ても、日本人が世間を気にしていたエピソードがある。江戸時代に新潟県長岡市野の村で入札が行われており、中世では盗みや放火、殺人などの事件にさいして村人が集まって投票で犯人を決めるという例があり、落書と呼ばれていた。投票で犯人を誰にするかを決めていたということは、どのように世間に見られているかが犯人にされるかどうかの判断基準となっていたということだ。このことから、当時から日本人は自分の身を守るためにも世間との関係を良好にし、人々に気に入られておかなければならなかったということが考えられる。

これから活躍する若者が必要なもの

先述の阿部は次のように論じている。

「欧米人は、日本人を権威主義的であるとしばしばいう。権威主義的とは威張っているということではない。自分以外の権威に依存して生きていることをいうのである。その権威が世間なのである。例えば皆と行動するとき、私たちはできるだけ皆と合わせようとする。それはその限りでは協調的な行動なのであるが、時には没个性的で、権威主義的に見えるのである。何らかの意見を聞かれたとき、

自分の意見をきちんということが大切であるが、ほかの人の意見を聞きながら自分の意見をそれに合わせたりすることを権威主義的と呼ぶのである。」

グローバル化が進む中、人口の24%以上は、これまでの権威主義的な日本社会で生きてきた高齢者であり、現在の労働人口の大部分は、その高齢者が育ててきた30代から40代の大人である。社会を形成する大人はこれまでの権威主義的な考え方であるが、これから求められるのはグローバルに通用する個人主義的な考え方である。つまり、この社会の中で、これから自立していこうとする若者は、その権威主義社会と、個人主義社会に挟まれて生きていかなければならないということである。

まず、権威主義的な日本社会に通用するためには、世間や大人の目を気にすることも必要である。人と合わせる協調的な考え方も必要になる。このような社会の中で生きていくすべは、これまでの日本で生きてきた大人たちがよく知っている。そのすべを継承し、活かしていくことができる。

次に、グローバルに通用する個人主義の社会では、自分の意見を明確に相手に伝えなければならない。そして、どちらかの選択を迫られたとき、他人の判断にゆだねず、自分で選ぶ力が必要になる。ここでは、日本社会で生きてきた大人たちのアドバイスが役に立たないこともあるだろう。そのため、まず、自分の心の声を優先し、自分の意見を正当化し論理立てる必要がある。

これから自立していく日本の若者は、これまでの、又は現在の権威主義社会にも対応しなければならず、そして、これからの個人主義社会にも通用しなければならない。そのためには、日本のこれまでの協調的な考えを継承しつつ、他人に頼らない強い自分を持たなければならない。

参考資料

阿部謹也『「世間」とは何か』講談社 1995
ダイヤモンド就活ナビ
<http://navi14.shukatsu.jp/14/>
『広辞苑 第6版』

矢寺さんの喜びの声

「文章力をみがく」という授業の一環で、コンテストに応募いたしました。自分の考えを、参考文献などを用いて表現したのは初めてで、頭を悩ませながら書いた文章なので、評価をいただき嬉しく思います。私は大学生になるまでは、親の目、先生の目を気にしながら生活をしていました。何をしても親の許可をとっていたり、他人に評価されたいから勉強を頑張ったりと、行動の軸が他者にありました。しかし、ある時、自分が本当にしたいことは何なのだろう？という問いが浮かびました。友達はみんな趣味を持ち、自分のしたいことをしている。私もやりたいことをやらなきゃ人生損すると気づきました。以来、生活の中心にもなっているくらい、やりがいをもってやっていることがあります。だから、これからの就職活動や将来について考える時も、本当の自分の声に従って、前向きに進んでいこうと思います。人は、思っているほど、自分に関心を持っていないものです。

【エッセイ部門特別賞】 大人と子どもの考動力

文学部1年 加藤菜月

1. はじめに

現代社会、大人たちが口を開けば、そうしなければならない、こうであるべきだ、などといった、義務や強制を感じる言葉が多い。そして、それに伴い論理的かつ機械的に考えて、動く。これをここでは大人の考動力と定義づける。しかし、実際電車に乗ると聞こえてくるのが、上司の愚痴、仕事への不満、人間関係の悩みがほとんどだ。大人は、大人の考動をするがゆえに、ストレスを感じているに違いない。これには、大人がそう考動せざるを得ないような社会的風潮が影響していると考え。完璧な大人ではない若者は、社会へ出ると人生を縛られてしまう。いつしかこんな風に考えるようになった。つまり現代は、大人にとっても若者にとっても生きづらい社会だと言える。

一方で、その大人とは真逆の考動力を持つ子どもに焦点をあてたい。一見子どもは何も考えず過ごしているように見えるが、大人が見習うべき考動力がたくさんあるのだ。子どもの考動力を真似すれば、人生を楽しめるに違いない。子どもの考動力を取り入れていると考える映画制作会社ピクサーを参考にしていきたい。

2. 子どもの考動力とは—創造力—

ここで、子どもの考動力とは具体的などのようなものか挙げていきたい。「創造する」子どもは、ペンで描いたり、ハサミで切ったり、のりで貼ったり……手にした物でとにかくなんでもやってみる。そして、そこから何かを生み出す。「信じる」子どもはサンタクロースや物語に出てくる妖精の存在を信じている。だからこそ夢中になれるし、楽しむこともできる。「他人の目なんか気にしない」子どもは、周囲の人がどう思うかなんて気にしない。やりたいことを思いっきりやるだけ。「思っていることを言う」子

どもは、常に本心を直球で伝える。思ってもいないことを言わないし、遠回しな言い方もしない。「尋常でないほどテンションが上がる」子どもは、嬉しいことや興奮するような出来事があれば、これでもかというくらいにテンションが上がる。ドキドキやワクワクなどの感情を素直に爆発させることができる。「差別しない」子どもは誰のことも差別しない。分け隔てなくすべてを受け入れることができる。「直感で行動する」子どもは本能のままに動く。必要以上に思い悩んで、時間を無駄にするようなことはしない。「褒め言葉を受け入れる」子どもは、褒められると素直に受け入れる。無用の謙遜はしない。「ひとつのことに集中する」子どもは、そのときしていることに集中する。名前を呼んでも気付かないくらい物事に没頭することができる。「型にはまらない」子どもは、型にはまらず我が道を行く。それが普通かどうかは気にしない。

子どもの創造力は無限にある。それとともに、子どもは、創造力が最大限に発揮できる生き方をしているのだ。今、世の中が必要としているのはこれらの、子どもの考動力なのである。

3. 大人の考動力とは—リスク回避—

一方、大人の考動力を具体的にあげてみる。「安定をとる」大人は常に周りの目を気にする。他の人と意見が合わなくても自分の考えを大っぴらにせず、他の人たちから悪く思われない行動をとる。つまり、大人は自然とリスクを回避しているということになる。社会に出ると賢い大人の生き方は無難な生き方であると、植え付けられてしまうのだ。これらは、現代の大人や文化が生み出した社会的風潮であると言える。

人々は、この社会的風潮に従った、大人の考動をすることで、日々ストレスを感じているのだ。大人だって、枠にとらわれない仕事や人生の楽しみ方をしていいはずである。

4. ピクサーの創造力—エドのビジョン—

では、大人が子どものような考動力を身につければ、どんなに人生が楽しめるだろうか。アメリカに、映画制作会社、ピクサーという会社がある。ピクサーは、トイストーリーやモンスターズインクなど様々な大ヒットアニメ映画を生み出した。この成功には、創立者であるエド・キャットムル、ステイブ・ジョブズなどが従業員に伝えた明快なビジョンが関係していた。この会社のシステムを参考にしていきたい。

「ここにいる全ての従業員は子ども時代を思い出す必要がある。」実際ピクサーの会社は日本ではあり得ない環境設備があるのだ。例えば、社内に、ゴルフ場、サッカーコート、ビリヤード、プールまでもがある。従業員が仕事に行き詰まらないよう、常に子どもの心を忘れず仕事に取り組めるようにするためだ。従業員はこれらによって、どんな時でも、子どもヘタムスリップでき、様々な創造力が刺激されるのである。

「ここにいる全ての従業員は、平等である。」エドは新人やベテランに限らず、どんなアイディアも否定しない。あらゆるアイディアも平等に受け入れる。全ての従業員が自分のアイディア、意見、主張を言える環境を作ったのだ。

「ここにいる全ての従業員は、リスクを背負ってでも、何かを生み出すべきである。」リスクを恐れていては、何も生み出せない。常に新しいことにチャレンジし続けるべきなのである。

これらのビジョンによってピクサーは大成功をとげた。

5. 終わりに

これらのピクサーのビジョンは、子どもの考動力に一致すると考える。子ども時代を思い出して楽しく考動すると、自然に仕事も人生も成功する。つまり、大人は子どもの考動力を真似すれば、またそのような社会的風潮になれば、大人はもっと人生を楽しめるようになるのだ。大人だって子どものように、生きていいのだ。

加藤さんの喜びの声

この度は、特別賞に選んで頂きありがとうございます。今回は『子どもと大人の考動力』という題で書かせてもらいました。私は幼い頃から、映画制作会社ピクサーの映画が好きで、その会社に興味を持ち、そこで働く人にも興味を持ちました。ここで働く人の考動力を自分なりに考え、子どもと大人の考動力に焦点をあてました。今後、子どものような考動力をもつ大人を見てみたいです！今回このコンテストに応募したきっかけは授業の課題だったということです。私は自分の意見や人に伝えたい事を文章で表すという事が得意ではないので、今まで自分の文章を人に見てもらう機会がありませんでした。ですが、授業で友達や先輩、先生に文章を見てもらうことで、自分の伝えたい事を上手く整理出来るようになりました。また作文コンテストを通して、改めて色々な人から意見や評価を頂き、自分を見つめ直すことや、向上心を覚えました。私にとってとても貴重な経験をさせて頂きました。

【ショートショート部門最優秀賞】 さよならワッペンさん

文学部2年 古谷友香里

「ばあちゃん、好きな人が出来た」

小声で私にそう言ったばあちゃんは、内緒やでえ、と顔を赤くした。私がどう返そうか迷っていると、ばあちゃんは相手について勝手に話し始めた。背が高くて小顔、髪は黒く声は割と高めで、いかにも好青年という感じらしい。名前を尋ねるとワッペンさん、とばあちゃんは嬉しそうに答えた。ばあちゃんが名前を聞き間違えたのか、勝手にあだ名を付けたのかは分からなかったが聞き直すのも面倒だったので、ふうん、ワッペンさん、と納得しておいた。まだ母は向こうで職員の人と話をしている。

ばあちゃんがこの介護施設に入居した二年前からずっと、ここへ月に一度訪れるのだが、母は毎回私を連れて行く。恐らく義母と話すのが嫌なのだろう。ばあちゃんは事あるごとに母に口出ししていたし、その度に母はかなり不機嫌になるのだった。私もばあちゃんがそんなに好きではなかったが、母が機嫌を損ねる方が嫌だったので渋々ここに来ている。帰るよ、と母が私に声をかけたとき、ばあちゃんはまだワッペンさんについて話していた。また今度聞くから、と言って私は席を離れ、母とエレベーターに乗った。振り返ると車椅子に乗ったばあちゃんは優しく手を振っていて、私がぎこちない笑顔を返したときに扉が閉まった。

「何話してたの」

母が興味なさそうに尋ねるので、別に何も、と素っ気なく答えた。

「なに、あんた怒ってんの？」

「怒ってないけど」

「けど、何よ」

怒っているわけではなかった。だが、何かが引っ掛かっていた。今日ばあちゃんとはワッペンさんの話しかしていない。じゃあワッペンさんが気になるのかというと、そういうわけでもない。

『ばあちゃん、好きな人が出来た』

そうだ、これだ。私はこの言葉になんとか違和感を覚えていた。いや、嫌悪感と言ってもいいかもしれない。でもそれは、ばあちゃんのことが嫌いだという

感情ではない。好きな人が出来た？ じゃあじいちゃんはどうなるんだ。じいちゃんは八年前に亡くなったが、じいちゃんなんていなかったかのように、余りにも嬉しそうに言うばあちゃんが許せなかったのだ。年のせいでじいちゃんのことなんか忘れてしまったのだろうか。

それからは私が施設を訪れる度に、ばあちゃんはワッペンさんのことを話した。なぜ私にだけ話すのかは分からなかった。嫌悪感を抱いていたから最初はほとんど聞き流していたが、症状が進んでじいちゃんと過ごした日々さえも忘れてしまった証拠ではないかと思った。親に言おうかと考えたが、ばあちゃんに「内緒やでえ」と言われたことが妙に心に残っていて結局言いだせなかった。

私はな、ワッペンさんのな、手が好きやねん。ワッペンさんの手は結構ごつごつしてるんやけど、大きくて、なんでも包める感じがめっちゃいいねん。ほんで、手は大きいのに手首はしゅっと引き締まってるのがまたたまらんねん。ええやろ？ ええやろ？ あとな、口元がな…ばあちゃんはいつもこんな調子で話すのだった。ばあちゃんは今まで見たことのない生き生きとした表情で語るので、次第に本物のワッペンさんに会いたくなっていった。

何十年も共に生きたじいちゃんを忘れさせる人物とは、どんな人なんだろう。「お菓子の時間ですよ」

あ、お孫さんですか、と一人の男性が近づいてきた。どうやらばあちゃんのお世話をしてくれている担当の人らしく、ばあちゃんと親しげに話していた。もしかしたらこの人がワッペンさんなのかもしれない。いや、なんの根拠もないが、直感でそう感じた。その男性に車椅子を引かれたばあちゃんは笑顔で、じゃあまた今度な、と手を振った。私も小さく手を振ってばあちゃんと男の人の背中を見つめた。

そんなもののかな、と思った。どれだけ愛した人でも、側にいなくなって時間が経過してしまえば忘れてしまって、また別の人を愛するようになるのか。そんなもののかな。

「ねえ、ばあちゃんとじいちゃんって、仲良かった？」

家に帰って母に聞いてみた。じいちゃんが生きていた頃、私はまだ幼かったの

であまり覚えていない。

「うーん、まあ普通だったかな、年相応って感じ。そんなこと聞いてどうすんの」「いや、まあ、ちょっと気になって」

「なに、ばあちゃんになんか言われたの？」

そうじゃないけど、と濁して自分の部屋へ向かった。やはりワッペンさんのことは言えなかった。

次にばあちゃんのところを訪れると、少し華やかな雰囲気になっていた。折り紙で作った輪を連ねたものが壁に飾りつけられていて、みんな一本ずつ花を持っていた。職員フロアの壁には「わたべさん、おつかれさまでした」と書いた幕が貼られていて、みんなにこにこしている。うちのばあちゃん以外は。

ここ最近の元気な姿は夢だったのではないかと思うほど、ばあちゃんは悲しい顔をしていた。猫背がさらに丸くなっていて、顔を上げようとしなかった。さすがに心配になって、どうしたのばあちゃん、と声をかけるとばあちゃんは消えそうな声で、ワッペンさん、ワッペンさんが、と答えた。そのとき、わあっと拍手が起こる。この前見た、ばあちゃんのお世話をしてくれている男性が照れくさそうに現れて、お辞儀をした。ありがとうね、頑張ってるね、と声をかけながら、みんな自分が持っている花をその人に渡している。ばあちゃんは花も持たずに後ろの方で見ていた。あの人に花を渡さなくていいのか尋ねると、ばあちゃんは切ない顔で言った。

「じいちゃんが死んだときのこと思い出すから嫌やねん」

そのとき、ようやく気が付いた。ばあちゃんはじいちゃんのことを忘れたのではなかった。むしろ、ワッペンさんをじいちゃんだと思って過ごしていたのだ。ワッペンさんがこの施設からいなくなってしまうことなんて私たちにとっては小さなことだが、ばあちゃんにとっては大事なことだったのだ。

ワッペンさんが最後の言葉を残している。そして笑顔でお辞儀をしたとき、もう一度大きな拍手が起きた。

「じいちゃん…」

そう呟いたばあちゃんが涙を流したのを見て、私も視界が滲んだ。

古谷さんの喜びの声

最優秀賞受賞の報告を受けたとき、驚きのあまり「え、はい、ありがとうございます」と普通の反応をしてしまいました。こんなにありがたい賞をいただけるなんて思っていなかったの、喜びが込み上げてくるまで時間がかかりました。昔から文章を綴ることが好きで、誰かに見せるためということでもなく勝手につらつらと書いていたのですが、こうやって表彰していただいたことで私が紙の上に置いた日本語たちが誰かの心に何かを残したのだなと感ずることができました。とても嬉しいです。この気持ちを糧に、また作品を生み出せたらいいなと思っています。本当にありがとうございました。

【ショートショート部門優秀賞】

時は移ろい 日は流れ

社会学部 1 年 山下壮士

その日、過去のぼくは未来の俺に大切なことを思い出させてくれた。

手元のとても汚い文字で書かれた古い手紙に思わず涙がこぼれる

「頑張っていたんだな……。一生懸命だったんだな……」

*

勉強も恋愛もうまくいかない一年だった。大学生活が嫌になり始めていた。去年を振り返るとそんなことばかりが頭にちらつく。苦勞して一年浪人までして入った大学で、多数の単位を取るのに失敗した。クリスマス前に彼女と別れた。去年はそんな一年だった。

だからか、新年を迎えた俺は気分が入っていた。とはいえ、その気合いをどこに向ければいいのか、何に注げばいいのかわからなかった。ゆえに、今も去年と同じで気分が晴れないままである。

そんな晴れない気分ではレの時を迎えてしまった。成人式である。単調な話を聞き、特に問題もなく式は終わる。その後には同窓会が待ち構えていた。わいわいぎやあぎやあと皆が酒を飲み、騒ぎ、べろんべろんになって会は終了した。そして、その後ただ淡々と歩を進め、独り暮らしをしている下宿に帰った。

「ただいま～」

おかえりを告げる声は全くなく、ただただこの声は空虚に消えていった。数か月前なら、彼女がうちに泊まっていったときはおはようもただいまも聞けていたのだが、今はそれを手に入れるために頑張らねばならない状況だ。

冷蔵庫から水の入ったペットボトルを取り出す。机の上に置きっぱなしにしてあったコップにそれを注ぎ、一息に飲む。酒を飲んだためか渴いていたのどが潤うと、今日の同窓会での出来事が霧が晴れるかのようにぼんやりと浮かんできた。

酒を飲みすぎて早々に潰れ、寝ながらゲロを吐くやつがいた。同じく飲みすぎて他人にやたら絡むやつがいた。そして、酔った拍子に長年溜まった自分の想いを告白をしたやつがいた。照れながらも相手に想いを伝えていたその姿は、なぜだかどうしようもなくうらやましかった。いつからか、誰かを積極的に好きになるのを恐れている自分がいたのだ。前に付き合っていた彼女はもちろん愛していたと言い切れる。しかし、恋人とい

うよりは親友の延長線上の人物のような付き合い方だった。

なんとなくあたりを見回す。だが、さっきまでの騒がしい仲間たちはそこにはいない。あるのは物言わぬ本棚や会話のできぬテレビ、そして自分独りしかいないという事実だけだった。ふつふつと心の底から変な感情が流れ込んでくる。自分はこの感情の名前を知っていた。

「寂しいのか、俺は……」

独り暮らしを始めてもう一年が経とうとしているのに、そばに誰もいないという事実、自分はいまだ慣れていないらしい。

寂しさを紛らわせるため、今日撮った写真を見ようとカメラの入ったカバンに手を伸ばした。が、それよりも先に気になるものに手が当たった。

「20 才の私へ、か」

それは、小学校の時に書いた未来の自分にあてた手紙だった。ミミズが這ったような汚い文字がそこに書いてあった。同窓会の途中で渡されたのだが、寝ながらゲロを吐き出した友人の介抱のために読めなかったのだった。

だが、正直それでよかったという気持ちもあった。小学校のころには思い出したくもない嫌な記憶が二つもあった。好きな女の子に大嫌いと言われたことと、夢を叶えることはできないと父に言われたことだ。この二つのことが起こった後に書かれた手紙のはずだ。さぞや絶望している自分がこの中にいるのだろう。そう思うとみんなの前で開きたくなかった。楽しい酒の席が苦くつらいものになりそうだったからだ。

「読んでみるかな」

俺は、ピンク色の封筒を開けて中を見た。

しかし、その内容は俺が思っていたものとは真逆だった。

～20 才のぼくへ～

元気になっていますか。ちゃんと健康的な毎日をすごしていますか？

これを読んでいるころにはいろいろがんばっていると思います。

勉強は大変でしょうががんばっていますか？

毎日楽しくすごしていますか？

お父さんをみかえすことには成こうしましたか？

あの人が言っていることは正しいけど、ぼくはきつとゆめをかなえられると思っています。

いっぱい考えて、いつかぜったいみかえしてください。

あきらめなければきつとかなうと思います。

お父さんにないしょにしたままゆめをかなえて、それを伝えればお父さんもゆめはかなえられるなんて言わないと思います。

だから、ゆめをかなえるのをがんばってください。

あと、あの子とは今も仲よしですか？ケンカしても仲直りはできるはずです。

まだケンカをしているなら早く仲直りをしてください。

もし付き合えたりしているなら大事にしてあげてください。

付き合えていなくても仲よしでいてください。

いつか想いは通じると思います。

それでは、ゆめをかなえるための努力をがんばってください。

6 年花組 ○○ ○○

涙が止まらなかった。

小学生の俺は絶望なんかしていなかった。それどころか、未来の、今の俺に夢を託して諦めないでと伝えてくれていた。どうしても叶えたくて、でも今の自分ではできないのがわかっていたから一生懸命にどうすればいいか考えていたのだ。今の俺のように漠然と考えてみては何一つ具体策を出すことも、行動もしないのとはわけが違った。幼いながらにどうすればいいのかも、具体策も出していた。必死だったのだ、父親から諦めろと言われた夢を叶えることにも、あの子と恋仲になることにも。

「頑張っていたんだな……。一生懸命だったんだな……」

頬を流れる涙は全く止まってくれなかった。絶望的な状況でも頑張る力を昔のぼくは持っていた。いつからだろう、今の自分ではどうしようもないとわかった瞬間諦めるようになったのは。いつからだろう、深く考えずにできないと思い込み始めたのは。いつからだろう、恋にも勉強にも本気にならなくなったのは。傷つくのが怖い。見下されるのが怖い。今の自分はそんなことばかり考えているじゃないか。

「こんな無様な姿、過去の俺には見せられないな」

久しぶりの感覚だった。今何をすべきだろうかと考えるようになった。

涙は、すでに拭った。

何かを始めなくてはと思ったのだ。

そして、考えた末に俺はブログで日記を書き始めた。

毎日じゃなくていいから、気づいたことをブログに書く。勉強のこと、恋愛のこと、くだらないこと、なんでもいいか

ら書くことにした。その時に自分が思っていたこと、考えていたことを残すことにしたのだ。これが、自分で考えた末に導き出した今できることを実行した結果だった。ブログを書くことによって、過去の自分が何を喜び、何を悲しみ、何を悔やんでいるか冷静に見られるようになれば、未来が変わるに違いないと考えたのだ。ちょうど、昔のぼくが今の俺を救ってくれたように。

また、誰かに見てもらうということも大事だった。誰かが見るのかもしれないと考え、何かの拍子に見てくれた人を楽しませたいと思うと、物事についての書き方や、見せ方について考えるようになった。

今日も俺はブログを更新する。ブログの名前は、時間は皆に平等に過ぎ去っていくものだと未来の自分に伝えるため

に、そして、過ぎ去った時間は元に戻らないということを忘れないように、こんな名前にした。

『時は移ろい、日は流れ』

ブログに書いた初めての日記にも、この考えが入っていた。初めての日記のタイトルは『一期一会』だ。彼女と別れてから、本当に色々なことを考えていた。その中で特に思ったのが、どんなに仲が良くてもいずれ別れが来るということだ。それは、俺と彼女との間のような再会できる別れかもしれないし、もう会うこともかなわない別れかもしれない。だから、これから仲良くなっていく人や、仲良くなれそうな人を、たくさん笑顔にさせてあげよう、たくさんの元気をあげよう。そういったことを気持ちを吐き出すように長々と書いたのだった。

日ごとにブログを訪れてくれる人は

両手で数えられるほどしかないが、今日も俺は日記を書く。未来の閲覧者となる自分のために、決して諦めず、考えて行動し続けることを忘れないでと伝えるために。

今日も、俺は生きていく。流れる時間と日にちに逆らうのではなく、その中でやれることを精いっぱいやった証を刻みながら。

この話の締めはいつもブログに書いている締めの言葉にしようと思う。これからも、自分の生活は続いていくのだから。いつものようにこの言葉で続きがあるのだと言い聞かせよう。そのためにも、この言葉で締めよう。

今回はここまで、また次回。

山下さんの喜びの声

「おめでとうございます、あなたの作品が優秀賞に選ばれました」

電話越しに伝えられたそのセリフは、午後の昼寝から着信で起こされた覚醒しきれていない私の頭でも、携帯電話の質の良くない音声でも、はっきりと心に聞こえた気がしました。『寝耳に水』という慣用句がありますが、『寝ぼけ耳に受賞』とか、そんな言葉ができてもいいレベルの驚きです。なんで私の作品が賞を取れたのか、正直いまだにわかってないままに授賞式も終えられてしまいました。

賞をいただいて、改めて自分の人生を振り返ってみると、何かで表彰されたのは小学校の時に「気持ちの良いあいさつができたで賞」とかいう謎の賞をもらったきりだということに気が付きました。

人生で初めてもらった賞と二回目でもらった賞のレベルの違いに驚きと自分の日々の成長を感じながら、今回の審査や企画をしていただいた方々、原稿のチェックをしてくれた友人たちに感謝をし、自らの更なる発展を目指していこうと思います。

【ショートショート部門優秀賞】 考動力

文学部3年 山本綾香

乗り込んだ電車は、いつものようにくたびれたスーツで混み合っていた。

いつもなら耳につくヘッドホンの音漏れも、ここ数日は気にならない。頭の中は月曜日の朝の詩織の言葉でいっぱいだった。

「お父さんは、やりたいことしてないじゃない!」

初めて娘が声を荒げたことよりも、反抗的な態度をとったことよりも、自分がその言葉に何も言い返せないことに悲しくなった。ため息を付いて曇った車窓を見ると、外は見えず、代わりに疲れ切った自分の顔が見えた。

詩織は高校3年の娘だ。昔から、優しくて真面目な子だった。勉強もよくでき、友達も多く、学校の先生から聞くのはいつも褒め言葉ばかりだと、妻が鼻を高くしていた。そんな妻が昨日、心配そうに娘のことを話したのだった。「進路希望、出していないのはもう詩織だけだっ。」担任の先生から直接連絡があったのだという。進学か、就職か。この時期には自分の希望する進路を学校に報告しな

ければならぬらしい。妻の話では、成績に問題はなく、希望すればある程度の大学へ進学できるということだった。だったらなぜ悩む必要があるのか。本人に理由を尋ねても、うつむいて黙るだけらしく、打つ手をなくした妻は「あなたからもなんとか言ってあげて」と私に話したのだった。

「詩織、進路決まってるんだって?」

詩織は朝食のトーストを食べる手をとめ、うつむいていた。

「父さんは、別に大学に行ってもいいと思ってるぞ。女の子だから、下宿は心配だけど、詩織がそうしたいなら貯金だってある。」

長く伸びた前髪で表情はわからなかった。

「詩織の、やりたいことをやりなさい。お父さんはそれが一番いいと思うぞ。」

ガタン、という大きな音を立てて詩織が急に立ち上がった。食卓のコーヒーが揺れる。

「やりたいことってなによ。お父さん全然あたしのことなんて考えてないくせに!」

「詩織、お父さんに何てこと言うの!!」

妻が叫んだが、私は詩織の今までにない態度に驚いて、ただただその姿を見つ

めていた。

「第一お父さんはやりたいことしてるの?! 毎日毎日同じ時間に会社行って、くたくたになって、お父さんは、やりたいことしてないじゃない!」

そんなことはない、という言葉は喉でつかえて音にならなかった。詩織としばらく目があう。真っ直ぐなその眼は私に似ていた。いつかの自分の瞳を見ているようで、目を逸らした。それから3日間、言葉を交わしていない。妻はなにか話しているようだったが、内容は他愛ないものだった。

いつもの駅で押し出されるようにして電車を降りた。定期券を通す列が規則的に進む。腕時計を確認する。7時35分。いつもと変わらない、繰り返される通勤の風景。周りの同じ年代のサラリーマンは、ロボットみたいに同じ動きをしている。隣の改札を真新しいスーツを着た青年が抜けていった。昔は私にも、やりたいことがあった。「やりたいことやって、やっていけるほど世の中は甘くない」という親の反対を押し切って、高校卒業後地元を離れた。なにかでかいことをしてやる。根拠のない自信と若さに後押しされ、そんなことを思っていた。だけどそれは夢であって、現実には咲かせる

には、少し生命力の弱い花だった。やりたいことはやりたいことのまま、やがてはそんな気持ちさえ忘れ、やらなくてはならないことを消化するだけで手いっぱいになった。疲れて家に帰って、また朝が来て電車に乗る。詩織には、私も、何も考えずに同じことを繰り返すロボットのように映ったのかもしれない。だったら尚更、少し無理をしてでも、詩織には好きなことをさせてやりたいという気持ちがわかるはずだが。成績に問題がないなら、何が悩みの種だ……考えは月曜日、火曜日、そして今日と同じ場所を逡巡し、そうこうしている内に会社の前に着いていた。気持ちを切り替えよう、大きく呼吸をして中へ入った。

今日は帰りが珍しく早かった。電車の座席に腰かけて、車窓から夕暮れを見ていた。長く伸びた川沿いに、赤いレンガ造りの建物がある。懐かしい光景に目を細めた。昔よく行った美術館だ。学生時代、妻と付き合っていたころのデート、まだ赤ん坊の詩織も連れて行った。詩織は小さいころから絵が好きで、話せるようになったころには、「びじつかん」と言って私を外へ連れ出した。幼稚園の頃、なにかのおまけでもらったようなクレヨンを使って描いた絵を見て、「この子は才能があるかもしれない」と、少し良い画材を買った。詩織はそれを喜んで持ち歩き、いつもどこかへ出かけては、その場所で描いてきた絵を見せてくれた。今となってはただの親馬鹿な気もするが、絵を描いているときの詩織は楽しそうで、嬉しそうで、見ているだけでも幸せだった。今でもそれは変わらない。我が娘が幸せそうなら、多少身を削ってでも応援してやりたいのが親心だ。そう、それは変わらないのだ。「やりたいことをやりなさい」それは父親としての、譲歩でもなく助言でもなく、願いだったのだ。

ふと、詩織の言葉がまた頭で再生される。「お父さん全然あたしのことなんて考えてないくせに」。そうか。考えているばかりで、伝えてこなかった。話さなければ、伝わらないのも無理はないのに。家へ帰ると、妻が夕食の用意をしているところだった。

「あら、早かったのね。おかえりなさい。」
「詩織は？」

妻は娘の部屋がある 2 階に視線をやった。

部屋のドアを開けると、詩織は少し驚いてこちらを見た。

「進路、どうするんだ。」

詩織はうつむいたまま黙っている。部屋に目を向けると、本棚にはたくさんの参考書。そして隅には、あの時の画材が置かれていた。

「詩織はもう、覚えていないかもしれないけど、昔一緒に美術館へよく行ったんだ。父さんは、絵が好きだった。だけど、少しずつ、絵を見ている詩織が好きになった。」

少し照れくさくて窓の外に目を向ける。落ちていく陽の光が部屋に紅く差し込んでいた。

こんな風に話すのも、随分と久しぶりだった。

「父さんも昔は、やりたいことがあった。それは、父さんのために、やりたかったことだ。それが、やがて母さんのために、詩織のために、どんどん変わっていった。父さんは、今はもしかすると情けないかもしれない。くたくたのスーツを着て毎日毎日同じことをして。でも、それでも父さんは、なにができるかを考えて、詩織のことを応援する。仕事をして、帰ってくる。それが今の父さんのやりたいことだ。」

いつの間にか詩織は顔をあげて、私を見ていた。真っ直ぐな瞳だった。なにかでかいことをしてやる、そう思っていた

自分はきっとこんな瞳をしていただろう。

「だけど、詩織の進路は父さんたちが決めることじゃない。もしかすると、悩んで苦しいかもしれない。それでも、考えて考えて、自分で選びなさい。これから歩く、自分の道だ。ちゃんと自分で歩目を踏み出しなさい。」

しっかりと瞳を見つめる。今度は逸らさない。

「詩織のやりたいことを、やりなさい。」
はっきりそう言って、部屋を後にした。妻は少し心配そうに私を見ていたが、「大丈夫だ」とだけ話すと、微笑み夕食の用意を続けた。

木曜日の朝のことだった。詩織は朝食のトーストをほおぼる私に希望の進路が書かれた紙と 1 通の手紙を渡した。長かった前髪は切りそろえられ、真剣な表情が真っ直ぐに向けられた。

「地元を離れて美大に行きたい。」

妻は驚いていたが、私は微笑んだ。昨日見た部屋の隅の画材は、挨ひとつかぶっておらず、今でもこまめに詩織が絵を描いていることを教えてくれていたのだった。

「そうか、頑張りなさい。絵は素敵だ。」

詩織は嬉しそうに目を細めると、紙を持って 2 階へとあがっていった。その足取りは軽く、自分の選んだ道を、自分で歩き始めたように見えた。

「いつの間にか、随分と大人になってたんだなあ。」

コーヒーを飲みながら、手紙を開ける。絵はがきだった。

そこにはあの、夕暮れの川沿いと、懐かしい赤レンガ。手をつなぐ父と娘が描かれていた。

「おとうさん、ありがとう。」

その小さな文字は夕暮れの風景とともに、胸にじんわりと溶け込んだ。

山本さんの喜びの声

この物語は、あれやこれやと自分の中の引き出しを引っくり返して、云々と考えて書いたものです。なので、これが読まれることは、自分の中を見られているようで、ほんとうのところ少し照れます(笑)

とはいえ、文章を書いて、誰かに読んでもらう。そして、その誰かが何かを感じてくれたということ。とてもとても嬉しいことだと思っています。なにかを見つけて、なにかを感じて、何かを伝えたいと思うことが「考える」ことなら、それを文章にして、一生懸命に言葉にしていくことが「動くこと」。これからも自分なりに考動していくことを、大切にしようと感じました。今回はこのような賞をいただきまして、本当にありがとうございました！

受賞作品は、どの作品も大変読み応えのあるものでした。作者である大学生のみなさん、ご指導にあたられた各授業の先生方に心からの敬意を表します。「文章を書く」ということは、決して楽な行為ではありません。程度の違いこそあれ、さまざまな苦しみを感じられたことと思います。しかし、それ以上に完成したときの達成感は大きかったのではないのでしょうか。そして、手をかけた分だけ、完成した作品を誰かに読んでもらいたいという気持ちになったのではないのでしょうか。

本コンテストを通じて、みなさんは書く楽しさと発表する楽しさを味わわれたことと思います。この経験によって、文章を書くという行為を見つめ直してもらえたら幸いです。なお、受賞作品の掲載にあたっては、作者の意思を尊重し、こちらでの編集は最低限にとどめさせていただきました。掲載した文章は、ほぼ原文通りであることを書き添えておきます。

最後になりましたが、今回のコンテストに関わってくださったすべての方々に、あらためて厚く御礼申し上げます。